第453号 昭和58年3月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

1983年（昭和58年）
3月号（No. 453）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

カンチェンジュンガ峰縦走
計画について　鹿野勝彦……（1）
—海外の山から—
科学的な登山……（2）
ナンガ・パルバート柱状東岩稜
登頂（2）
ヘルリッヒコッファー隊……（2）
三水ネパールヒマラヤ
トレッキング　小林　碧……（2）
ネパール十首　小倉　厚……（3）
図書紹介……（4）
「鳥海山日記」「みんなが頂上にいた」
「西上州の山と峠」「雪煙をめざして」
「中央アジアの探検」「ヒマラヤの灯」
東西南北……（4）
報告　自然保護委員会，集会委員会
……（8）
お知らせ……（7）（9）（10）（11）
会務報告・ルーム日誌・会員移動（9）～
図書受入報告　図書委員会……（11）
カット／芳野（満）・松本（慎）・柏（秀）

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

カンチェンジュンガ峰縦走計画について

鹿野勝彦

この計画は一九八四年春に、世界第三の高峰、カンチェンジュンガ峰の主要なピーク、すなわち、南峰（八四九一㍍）、中央峰（八四七八㍍）、主峰（八五九八㍍）、西峰（八五〇五㍍）を結んで縦走することを目的として、スタートしたものです。カンチェンジュンガ峰は、いうまでもなく、世界でも、もっとも秀麗な山容を誇る高峰として、早くから登山家の注目を集めてきました。一九五五年イギリス隊によって主峰が登頂された後も、各国の登山隊があいついで訪れ、最近では京大隊による西峰の初登頂、山学同志会隊による主峰北壁からの初登攀、ヒマラヤ協会隊による主峰、西峰登頂など日本にとっても、なじみの深い山となっています。しかし、南峰から主峰を経て西峰に至る約三キロメートルに及ぶ稜線は、未だに人をよせつけず、世界最高の縦走ルートとして、未踏のままに残されています。

今回の計画はネパール側より入山し、ヤルン氷河から主峰西南のプラトー上に前進ベースキャンプを設け、南峰頂上直下の最終キャンプから主峰、西峰へむかう縦走隊を出発させようとするもので、中央峰と主峰のコル、主峰と西峰のコルへはサポート隊が入る予定です。八〇〇〇㍍を越える高所に三つのキャンプを別々のルートから進め、縦走隊は八〇〇〇㍍以上で、少なくとも三日間行動するという厳しい計画ですが、日本山岳

—海外の山から—

科学的な登山

奇妙な表現になるが、ヒマラヤの電化作戦がこのところクローズアップされている。今春、エベレスト西稜登攀に、ジョン・ロスケリーとBBCのアメリカ隊がテレビを持ち込み、人工衛星を介して生中継しようというものだ。この先鞭をつけたのは三浦雄一郎のスキー大滑降（一九七〇）で、サウス・コルの実況がBCに飛び込んできて、BCキーパーたちを楽しませたことがある。

もう一つは風力、太陽エネルギーの電化。今冬の八千㍍の冬季登攀は、エベレストの二隊、メスナーのチョーオユー、日山協のマナスル、北大のダウラギリ主峰の計五隊だったが、〝完全〟成功は北大隊だけだったといえる。

同隊は風力発電機、太陽電池を持ち込んでいる。BCからの全行程を雪洞に絞ったこともユニークであるが、その他に風力発電機（途中強風で破損）でBCの炊事用の融水を、また太陽電池で気象ファクシミリを受像、超音波吸入器、トランシーバー、雪洞内の照明用蛍光灯を作動させていることもユニークだ。冬季の日照時が百パーセントに近いことを考えると効率の高い処置といえる。

同隊は、冬季という悪条件を克服するための手段として、少ない登頂チャンスをつかむため適確な気象情報の入手につとめた。全欧州と中央アジアをカバーするタシケント（ソ連）と、中国からカスピ海をカバーするニューデリーの各気象ファクシミリを取って、予報判断の資料とした。このファクシミリを動かしたのが太陽電池（ほくさんHSP40、5・5キロ）で、自動車のバッテリーに充電し最大出力80Wを得、また三日間の曇天でも必要な電力を確保したという。

こうして得られた天気図で十二月十三日のチャンスをつかんだ。担当したのは名越隊員で、十三日は天候が悪化するとしているが、風は弱まることを予報した。事実その通りになり、小泉隊員は七四〇〇㍍のC2から出発、午後三時半に登頂、零下三〇度のなか、七九五〇㍍でビバーク、十四日、軽い凍傷のみで帰還している。

チョーオユーのメスナーは、八千㍍峰登山の高所ビバークは死を意味するとして登頂を断念したが、加藤保男はエベレスト南峰でのビバークで死を招いた、とメスナー自身、加藤との明暗の分岐点を日本の週刊誌で指摘しているが、北大隊の安間荘隊長も、今冬のチャンスは十二月十三日と二

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

留守番電話（電話番号234—六六五九）

会の伝統と、若い力とを結集して、目的を達成するために努力したいと思います。ネパール政府への登山申請書はすでに提出ずみで、許可取得についても、明るい見通しをもっています。

これまで基本計画の立案は、若手会員有志のグループで行なって来ましたが、今後、計画をより具体的に進めてゆくために、カンチェンジュンガ準備グループの会合を、定期的に行なうこととしたいと思います。その第一回を左記のように行ないますので、興味をお持ちの方は、ぜひご出席下さい。若い意欲的な会員の参加を、特にお待ちしています。

四月十日（金）午前十一時より
日本山岳会ルーム
連絡は事務局まで
（カンチェンジュンガ準備グループ）

三水ネパールヒマラヤ トレッキング

小林　碧

折井健一隊長以下二十名のトレッキング隊は十二月二十八日、ネパール国王生誕の日、グルカ兵の祝賀行進で賑わうポカラを出発した。

ルートは同行のヒマラヤ観光開発の宮原巍氏によって踏査された未開発のコースでアンナプルナⅣ峰から南へ派生する尾根の末端部を北上するものである。セテ川支流を渡ると真北へ向かってジグザグの登りが始まった。子供達の歓声に迎えられて登り切った尾根の部落は菜の花盛りで、ポインセチヤの赤い垣根、簷に咲き綴る紅紫のブーゲンビリア等、目に沁みるようであった。美しい自然の中に文明から置き忘れられたような山の人々の生活を目の辺りにして黙然と登り続ける。時折娘達が、切り出した石楠花の薪束を背負って下ってゆく。ポカラまで売りに出るのだそうだ。夕雲が垂れ込める頃、尾根にひらけたキャンプサイトに着いた。

十二月二十九日、暁闇の空にマチャプチャレ、アンナプルナの山群が次々に赤味を帯びて浮かび上がって来る。気温マイナス二度、待ち構えたカメラの放列がひと仕事終えると朝日輝く峰々に取り囲まれて豪華な朝食。折井隊長の提案でこの二、〇八〇㍍地点を宮原ヒルと命名した。尾根を北上、三時過ぎ石楠花林に拓かれたサウジェカルカ二、三〇〇㍍地点に幕営。夕刻激しい雹のあと雪が降り続いた。

十二月三十日、曙光に祈るポーター達の声明で目覚め、一面の積雪の上で朝食。昼近く苦むして亭々と生い茂る石楠花の木暗がりの十七日の二回しかなかった、と資料的に判断、二十七日の加藤のアタックは当然ではあったが、「判断違いからビバークを強いられ」（メスナー）、同日午後九時の交信を最後に「本格的な冬を告げる深い気圧の谷に呑みこまれてしまった」（安間）。

ナンガ・パルバート 柱状東岩稜登頂（2）

一九八二・ヘルリッヒコッファー遠征隊

次の日、私達は午前八時にショルシュ・リッターが第二氷原を登っていくのを見た。一時間後、長い距離をおいてテディ・ピオトロウスキが続いた。午近く、リッターは小さなロック・バンドを横切り南稜につき抜けている第三氷原に到達した。私達は、彼が再に急なスノー・リッジに向かって直登するのを見た。彼はスノー・リッジに着くやそのまま登り続けた。私達はバッィン稜から第三氷原での彼の行動を見守っていたが、午頃、雲が頂上を見ている私達の視界をさえぎってしまった。私達はショルシュが成功して第五キャンプに戻ってくるものと期待した。しかしながら、午後六時にショルシュが第五キャンプのテレポートに応答した時、この短い時間に頂上に達するのは無理であったということが分かった。

私はビバーク用具は、必ず持ってゆかねばならないと繰返し強調していた。と言うのは、第五キャンプからは、朝早く発てば、午後遅く頂上に立てるのはまちがいないが、同じ日のうちに同じキャンプに帰ってくることは不可能だからである。この理由から、頂上を攻撃しようとするものは、必ずビバーク用具を携帯すべきなのだ。不幸にして、私の忠告はいつも守られなかった。そのことはウエリ・ビューラーの単独登頂の時にあらわれた。彼は適切な用具なしで登ったので、遂に手と足は重い凍傷にかかってしまった。そしてこのような悲惨な経験をもったまま帰国しなければならなかった。

リッターとピオトロウスキは長い間隔をおいて第三氷原を登った。しかし彼等は際限のない粉雪に対処しなければならないことを知った。ショルシュは急な胸壁に積った雪に胸までつかって、しばしば停滞した。頂上に通じるアイス・フォールには部分的にフィックス・ザイルを張ることが望まれた。いずれにせよ、下降の時に、それは必要だった。ハルトムート・ミュンヘンバッハとウエリ・ビューラーが、同じ日に第五キャンプに上がってきたのは、本当に良いチャンスだった。彼等は、自分達の装備の他にザックの中に幾らかの食糧と、中でも、次の日、第三氷原で使うことになっているザイルを持ってきたのは幸いだった。しかしまた一方では、ウエリ・ビューラー達の出現は、小さなテントの中で四人が夜を過ごさなければならないので、この登頂グループは、よく眠れず体力の回復も充分でなく、前の日よりも消耗が早いのではないかと心配された。しかしながら、次の日、ウエリは時間以上よく眠っていたし、予想されたより消耗はしなかった。

一九八二年八月十六日、午前五時、彼等は第五キャンプで行動を開始した。四人のメンバーは、短い間隔をあけながら、セラックの東側に沿って

いずれにしろ、過酷な冬季登山の到来から、より以上に安全確保の配慮が必要で、その大自然の諸条件を引き出すには科学的な手法をより導入しなければならない。

（片山全平）

中で小倉班五名と袂れる。積雪の中に桜草が咲き乱れ、沈丁花が匂う。尾根を南面へ逸れて下った二、三〇〇〇㍍地点の一軒家チグリゴーツに到着。設営半ばに雷鳴急。霰、間もなく雪に変る。俄のことで傍の蕁麻の薮に飛び込んで鋭い棘にやられる者二、三。

十二月三十一日未明、有志九名三、〇〇〇㍍ピークまで往復、間近に迫るアンナプルナ諸峰そしてラムジュンヒマール、マチャプチャレの雪襞が眩しい。遠くマナスルが頭を覗かせる。十二時過ぎ尾根の南面の階段耕地に点在するグルンのチプリ村を通過。部落の老若男女が群がる石畳の径をナマステ（今日は）を連発しながら下ってゆく。玉蜀黍、稗が軒下に豊かでかなり恵まれた集落と見え子供達の表情も明るく楽しい。午後三時過ぎタップラン部落の水汲場に近い干上がった棚田を幕営地とする。一、七〇〇㍍地点である。天幕幅一杯の階段状耕地がマディコーラの谷底まで続いている。中天を十六夜の月が渡り大年の夜は静かに更ける。

一月一日、初鶏が一九八三年の夜明けを告げ、正面のラムジュンヒマールが薔薇色の雪煙を上げる。雑煮を祝い互いの健康を祈って乾杯。出発後間もなくマディ川支流の渓を越え分水界の尾根を廻りこむとセティコーラ流域へ下った。一、〇九〇㍍地点の磧上でチャパティの昼食。広々とした河原の浅瀬を渉り返しながら谷を出ると、冬田の畦道を延々と歩き続け、日が暮れて灯のともり始めたポカラの町へ入って行った。辿り着いたホテル、アンナプルナの薄暗いロビーに加藤保男、小林利明両氏のエベレスト登頂後未帰還を報ずる12／30付ライジングネパール紙があった。只々奇跡を祈る。

参加者 折井健一、広羽清、原田幹市、片岡博、小倉厚、中島孚、隈部恵子、高沢英夫、菅野弘章、山崎直人、秋山光平、網倉卓爾、千葉保之、新井規夫、小森谷春美、小林碧、宮原巍、他四名

＊

ネパール十首

小倉　厚

笑み浮べ眩しき若さスチワーデス
民族衣裳よく似合いけり
エベレスト彼方に見えて胸あつし
あくがれの峯ただに尊し
耕して天に至るやネパールの
山の姿はまた奇観なり
家畜との調和の中に人は在り
ただひたすらに生きてゆくごと
日本に生れてよしと友はいう
それほどひどしネパールの貧
中天に十五夜の月かかりたり
宿の臭気の中に見上ぐる
黒々と雪をも寄せず軍艦の
偉容に似たりアンナのⅡ峰
雪煙を頭にあげてヒマラヤの
ジャイアントの群天に一列

第二氷原を登った。ショルシュ・リッターにハルトムート・ミュンヘンバッハ、続いて、テディ・ピオトロウスキ、最後にウエリ・ビューラーが続いた。ウエリ・ビューラーは、二、三日前、メイン・キャンプでひどい下痢にかかって完全に回復しておらず、不調であった。だが、前日の踏み跡は進行を容易にし、まもなくショルシュは、氷原を真中辺で分けている平らなスノー・リッジの上に立った。

ショルシュ・リッターは、第四キャンプまで一人でルートをひらいてきたが、その時も先頭に立って一人でルートをつけていった。彼は側面の氷壁に到着したが、そこでアンザイレンをして登攀を続けた。五〇㍍登るのに一時間はかかった。それ程一㍍五〇の雪をつけた氷の登攀は困難をきわめた。氷河の輻射熱は、登攀者に非常な苦しみを与えた。ショルシュは氷の上の冷い粉雪の真只中にいた。加うるに、亜熱帯の太陽は、八千㍍の高度の登攀者達に無慈悲にそそいだ。七〇度の輻射熱で雪は到る処でとけ始め、全身ずぶぬれになったショルシュは、午後五時半になって引き返すことを告げた。この南稜近くでのビバークはマイナス三〇度から三五度の寒さで、ひどい結果を引きおこすものと予想されたからである。かくして、全員は次々と下降を始め、ずぶぬれになった身体を乾かして、二、三日中に次の攻撃をかけるために第五キャンプに戻った。

リッター、ミュンヘンバッハ、ピオトロウスキの三人はラストのウエリ・ビューラーの脇を通り降りていった。一寸して霧が晴れ上がった時、ウエリ・ビューラーが続いてこないことが解った。しかし、この数時間のうちに、ショルシュ・リッターが斜面につけたルートをたどって、ゆっくりと降りてくるものと誰もが思っていた。

ウエリ・ビューラーは単独行のすぐれた登山家であることは周知のことである。二、三ケ月前には、アイガーの北壁を八時間半で登っている。しかも単独でである。そこで私達は、彼は一人で頂上攻撃を開始したものと信じた。この単独行については私達は心配していなかった。私達が恐れたことは、ウエリはビバークしなければならないだろうし、それには何の仕度もしていなかったということであった。特にその夜は、気象通報によれば、ナンガ・パルバートでは秋が始まり、事実、八千㍍の高所の気温は、八月十六日の夜から十七日にかけてマイナス一九度からマイナス三五度まで下がったのである。この突然の変化によって生じた好ましからざる状態は、不充分なビバークの用具と合わせて考えると、非常な心配の種であった。彼は、この柱状岩

登頂ルート：大クーロワール→中央氷原→第1, 2, 3氷原（提供・ヘルリッヒコッファー氏）

元旦も晦日も吾はピスタリの
旅の中なり心豊かに

バドガオン妻への土産選びつつ
古きレンガの店をのぞけり

東西南北

新支部長紹介

越後支部

支部長　佐藤一栄（大正十三年生れ）会員番号二七六一番。昭和二十二年越後支部入会。昭和三十九年新潟峡彩山岳会々長。昭和四十二年新潟県山岳協会々長。昭和五十七年日本山岳会越後支部長就任。

昭和十五年の夏、妙高山へ初登山する。戦事中は徴用で東京の中島飛行機製作所に勤務し、北アルプスや奥日光の山にも行ったが、専ら単独で丹沢の沢登りと谷川岳東面の岩場へ通った。戦後、中国から生地の新潟市へ復員して越後支部へ入会。藤島支部長の指導を受けながら飯豊、朝日連峰を主として県内の山を歩く。昭和二十五年の国立公園指定を機に、朝日連峰越後側登山道の探査選定を、越後支部が県より委嘱され、会員笠原藤七氏らと相模山尾根を踏査答申した結果、越後側唯一の三面口登山道が実現した。川内山塊の早出川源流、飯豊連峰大日沢、朝日連峰岩井又沢を初遡登。御神楽岳、鬼ガ面山の岩場にバリエーションルートを拓く。飯豊連峰杁差岳と鳥海山吹浦口コースの厳冬期初登頂。国体登山は第四回の富士山に選手として、第十、十五、十八、十九回には監督役員として参加した。県外で印象に残っている山は九州の阿蘇五岳、鳥取の大山、奈良の大峰奥駆け、南ア仙丈岳、奥秩父の甲武信岳、日光白根山、東北の栗駒山や焼石岳、北海道の十勝岳、ニセコアンヌプリ等。

ここ十年間ほどは佐渡ケ島に惹かれて、大佐渡、小佐渡の山を、四季を問わずに歩き廻っている。

＊

越後支部のあゆみ

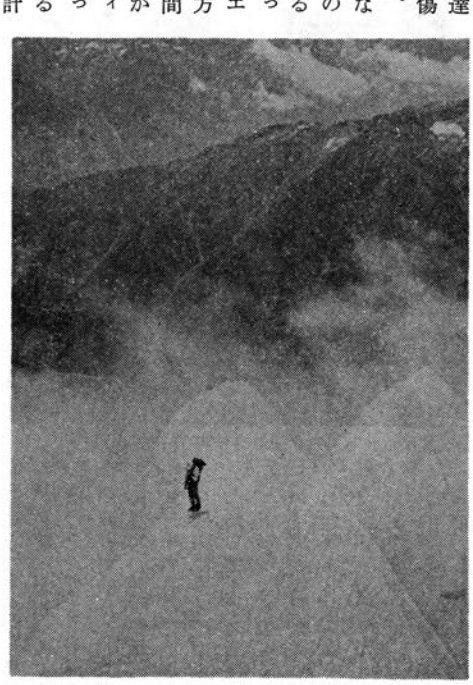
支部会員二八一名。委員二十六名（昭和五十七年十二月現在）

昭和二十一年の支部創立以来、同五十五年に日本山岳会名誉会員に推されるまでの三十五年間を、支部長の任に当たられた藤島玄氏が、真摯な情熱と卓抜した指導力によって、現在の越後支部を育て

撮影／高橋庄一

稜の終点である南峰に到達するだろうが、ひどい凍傷にかかって帰ってくるか、或いは、永遠に帰ってこなくてナンガ・パルバートの四十一人目の犠牲者になることは明らかなことであった。しかし私達はまたウエリのこの山に対するやり方を知っていた。彼は長い間この山を研究していたから、この柱状岩稜とバッティン・ゴルジュの雪崩も知っていたし、雪がとけてくると起こる落石についても計算していた。だからこそ私達は第二キャンプと第三キャンプの間の行動はすべて夜間のみと限っていたのだ。ウエリ・ビューラーは二十一歳という若さにも拘らず非常に思慮深い登山家であり、カミカゼ（原文にもカミカゼの語がそのまま使われている―訳注）登山とは無縁であった。このことは私達に確信を与えた。しかし、適宜なビバーク用具や、食糧も飲料水もなしで登っていったのも事実であった。二十四時間、私達はこの最年少の仲間を心配し続けた。一方、この最初にして偉大なヒマラヤの冒険に成功することも期待していた。

（以下次号）



第1氷原下部をC5へと登るショルシュ・リッター
（提供・ヘルリッヒコッファー氏）

図書紹介

鳥海山日記（正・続編）

佐藤　康　著

鳥海山の秋田県側五合目、千二百米余のところに祓川ヒュッテというのがある。この付近は、初夏になりブナの林がすっかり新緑に彩られ、カッコウが渡ってくる頃になってもまだ残雪が深い。

本書はこのヒュッテの管理人である著者が、昭和二十七年以来書きとめた日記を正・続二巻にとりまとめ出版したもので、いわばこのヒュッテの山小屋日記である。

正編は昭和二十七年～三十六年の十年間の日記を、続編はその後昭和三十七年～五十一年の十五年間分をそれぞれ収録している。

内容は山人の日記らしく飾りがなくきわめて簡潔であるが、気象や動植物のこと、また登山者や管理人自身のことにも触れ、山小屋の雰囲気を伝えて大変興味深い。

また各巻末に収められている十余編の「祓川余話」は、山に住み山に生きた山人の素朴な炉辺談話といったものであり、あと何編かを追加してほしいようなうるおいのある読物となって

上げられたもので、その間の業績は単に支部の充実強化というだけではなく、新潟県登山界の指向を示唆し、その発展と親和友好の大きな原動力となってきました。県山岳協会の役員をはじめ、県内登山団体の責任者は、殆どが支部会員であり、それぞれ二十年、三十年という長い年月に亘って、山で寝食をともにしてきた仲間たちですから、支部と山岳協会は表裏一体とでも言えましょう。「何もしない支部」の会員は、県山協の諸事業を通じて、積極的な登山活動を進めています。要するに本県の登山社会ほど、気持ちよくスムーズなまとまりを保っているところは、数少ないのではないかと思っております。

越後支部の年間行事としては、越後一の宮弥彦神社の神山、弥彦山の頂上に、日本山岳会創立発起人の一人である、本県出身の高頭仁兵衛翁の寿像がありますので、例年七月二十五日にそこで〝高頭祭〟と支部総会を開催しており、他に「玄山会」と称する会員懇親会を行なっているだけですが、第十九回新潟国体における残雪期の飯豊連峰集団登山や、支部創立二十周年記念の〝新潟県境全縦走踏査登山〟のように、事に当たっては総ての会員が役員隊員となり、率先協力して見事な成果を挙げるなど、支部の結束と行動力は、会員の心強い拠りどころとなっています。

海外登山は新潟県でも盛んで、支部会員の所属する登山団体や組織が、既に十指を越える遠征を行ない、遭難事故皆無で勝れた成果をあげています。当支部はヒマラヤトレッキング等の軽登山を実施してはいますが、本格的な海外登山は現

シャクナゲ／芳野満彦

十句

小林碧郎

白根葵咲けり夜明けの雪崩跡
風に咲く辛夷や雪庇なほ堕ちず
赤岳の夕翳野火におよびけり
川がらす睦ぶ瀬に降る榛の花
石楠花の蕾ゆたかに雪解靄
雪代の渦に巣立ちの川がらす
花辛夷雨に錆びつゝ猟期果つ
雪表の残雪かたく樺芽立つ
這松に巨き巌立つ雪解風
いわひばり岳の雪間は岩ばかり

いる。

このヒュッテも木造から鉄筋に建て替えられたが、著者の山小屋日記はその後も書き続けられていることであろう。そしてこれらの山小屋日記が、この山域の研究者や登山者に貴重な生の素材を提供してくれることと思う。

正編　一九八一年二月五日発行　二一一頁。続編　一九八二年二月五日発行　二四三頁
秋田書房　定価各一五〇〇円
（松家　晋）

みんなが頂上にいた　岡島成行　著

一九八〇年五月、日本山岳会チョモランマ北壁隊による登頂成功のドキュメントである。最初この本を著者から贈られたとき、表紙が火星人のような写真で漫画本のようなムードがあり、正直なところ、エベレスト本にしてはちょっとずれた感じを受けた。

しかし読み終った感想を卒直に述べると、これまでのエベレスト関係の書物にはない、まったくユニークな報告書で、まさに北壁隊の行動が立体的に捕えられている。何と表現していいか、つまり、赤と青の眼鏡でのぞくと浮き上がってくる立体写真があるが、それと似かよった感じで、北壁隊がどのようにして頂上を陥し入れたかの過程が生き生きとまるでその場にいるようなムードで読む者の心を引きつけて離さない。

チョモランマの報告はすでに「山岳」にも出たし、さらに講談社からも豪華な報告書が発行されているが、実のところ講談社の「チョモランマ・チベット」はばらばらとページをめくり、写真を眺めただけで本箱の上に積んだままになっている。そして今度この本を読んであらためてくわしくその登攀の実態を知ったのである。

チョモランマ隊に同行した読売新聞の記者で、しかも上智大山岳部の監督という立場の著者にして初めてこのユニークなドキュメントがまとめられたものといえる。まさに名コックの腕の冴えといったところで、従来の平面的な報告書のカラを破った新しいタイプのエベレスト本が生れたことを喜ぶのである。多数会員に一読をおすすめする。

昭和五十八年三月　ぱあめ、ぱあめ書房発行　三三八頁　定価一九〇〇円
（山崎安治）

西上州の山と峠　佐藤　節　著

ある一つの山域にとりわけ心ひかれ、回数多くかよいながら、その折々の想いや出会いを文に綴ってゆく。そして、それらが一冊にまとまって――といった本は少なくない。この『西上州の山と峠』も、その好例にあげられよう。

著者が西上州に足を踏みいれたのは昭和四十年代の初めと察せられるが、当時は彼地もまたそれほどは知られていず、限られた少数の炯眼な人によってのみ歩かれていた。著者はその一人であり、いわゆる〝よき昔〟の西上州をご存知なのを、私もうらやましく思う。

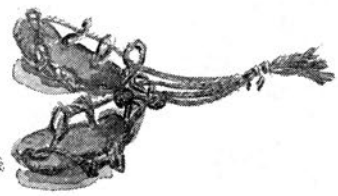
それだけに著者の西上州によせる愛情はなみなみならぬものがあり、文章にもおのずとにじみでている。しかし、その愛情がこうじてか、あまりにも感傷過剰な形容詞句が連ねられているのはいかがなものか。文脈がよじれ、文章を不確かなものにして、読者を混乱させてしまいかねない。綿々と続く美文調の賛歌もよいが、それとても、読者が正確に読みとれるようでなくてはなるまい。紀行文であろうとガイドであろうと、まず、読者にわかる文章でなくてはならないのである。

西上州を賛え、紹介するにしても、もう少し冷静な筆致のほうが、より読者にうったえる力があったのではないだろうか。

紀行文風な文章の中に、洋数字が混用されているのが気になった。「18のとき嫁に来て」「万場から1里、標高差にして735㍍」「13里の流程」「4日に

在のところ考えておらず、但し関係団体の遠征計画には、側面からの支援協力を惜しまぬといった姿勢です。一方、郷土の山をより深く知ろうと、地域研究の形で活動を続けている山岳会も少なくありません。そうした、ホームグラウンドとして誇り得る多くの山に恵まれているのは、越後岳人の喜びでありましょう。

越後支部はこれからも藤島初代支部長の意志を受け継ぎ、支部会員あっての支部ですから、何よりもまず会員の融和と、新人の加入に力を注ぐとともに、本部関係の仕事は斎藤前支部長に協力願い、近隣支部との交流を深かめるなど、支部としても登山の視野を拡げる心構えが必要と思われ、確りと足を地につけた歩みを続けてゆく所存であります。（佐藤一栄）



カット／松本慎太郎

ウェストン祭の歌と楽譜

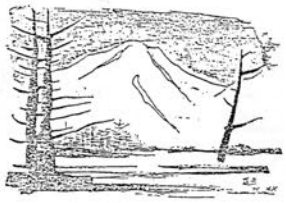
坂倉氏より本会へ寄贈

坂倉登喜子氏より一月十九日、「ウェストン祭をたたえる歌」の詩と楽譜が本会へ寄贈された。この詩はさる昭和四十八年六月、ウェストン師の「日本アルプス登山と探検」の大著を邦訳された故岡村精一氏（会員）が書かれ、辻荘一氏（本会名誉会員）が作曲されて、昭和四十八年六月三日の第二十七回ウェストン祭に坂倉氏をリーダーとするエーデルワイス・クラブのメンバーにより碑前で初めて歌われ、以来毎年歌い続けられている。岡村氏はこの歌が最初に碑前で公開される一日前の六月二日に死去されたという因縁がある。

この詩と曲はその後坂倉氏の手元に保存されていたが、今回辻氏が一小節はみ出した楽譜を書きなおし、岡村氏の直筆とともに坂倉氏が額に入れ本会へ寄贈されたものである。

ウェストン師のよい記念品として永く会に保管したい。

（山崎安治）



焼岳／柏　秀樹

図書紹介

わたる山旅」など、純然たるガイドブックならいざ知らず、なにかそぐわない感じがして、しらけてしまう。行の頭におどりの々がきているのも不自然である。編集段階での留意があってしかるべきものであろう。

昭和五十七年七月　新ハイキング社刊　一五〇〇円

（横山厚夫）

雪煙をめざして

加藤保男　著

エベレストに南北ルートから二度、マナスル無酸素登頂という現代のトップ・クライマーの登攀記が一冊にまとめられた。高校時代、兄につれられての穂高合宿から、アルプスで腕をみがき、アイガー北壁のダイレクト、ヴェッターホルン北壁直登、そして一九七二年二月グランドジョラス北壁と次ぎ次ぎにビッグ・クライムに成功し、そしてその翌年一九七三年秋RCCのエベレスト隊に参加、東南稜からポストの初登頂に成功した。

このRCCのエベレスト隊はどういうわけか完全な報告書を出しておらず、一九七四年四月に出された「RCCⅡ日本エベレスト隊報告書」というのはわずか四十三ページのパンフレットで、また山岳六十九年には湯浅道男隊長が「エベレスト南西壁報告」を書いているだけであり、今回登頂者の著者によって初めて石黒隊員とのペアーによる苦闘の模様が明らかにされた。

著者は引き続いて一九七六年日本山岳会のナンダ・デビイ登山に参加、次いでマナスルへ一九七八年アルパイン・スタイルで挑戦、さらに一九八〇年日本山岳会のチョモランマ隊に選ばれ東北山稜からの登頂に成功した。〝雪煙のチョモランマ〟はその登攀についてくわしく述べられている。

一九八二年秋、著者は再びアルパイン・スタイルによって、マナスルに挑戦、JACルートから十月十四日頂上に立った。無酸素での登頂であった。

これだけ内容のある書物が、日本語であるため、世界の登山界に知られないというのは、惜しい気がする。ずっしりと読みごたえのある一冊である。

昭和五十七年十一月十五日　中央公論社発行　二三一頁　定価一二〇〇円

（追記）本稿を書いて間もなく著者加藤保男氏は昭和五十七年十二月二十七日、厳冬のエベレスト単独登頂に成功後消息を絶たれた。まことに残念でならない。深く哀悼の意を表する。

（山崎安治）

プルジェワルスキー　中央アジアの探検　上下

田村俊介　訳

中央アジア探検史上の三巨峰として、プルジェワルスキー、ヘディン、スタインの名のあることは、今日ではもう常識であろう。そのなかでヘディンについては邦訳の全集をはじめ、早くから英訳書も数多く刊行されている。またスタインの著作は邦訳されたものが少ないが、英文であるから読める人が多い。これに対してプルジェワルスキーの場合は原著がロシア語であり英訳も邦訳もその一部であったため、前二者に比べ原著者自身の文章を読むことが少ないうらみがあった。しかもプルジェワルスキーが中央アジア探検を始めたのは一八七〇年の早期であり、ヘディンの一八九〇年、スタインの一九〇〇年と比べると、その間に二～三〇年のへだたりがあるので、先駆者としてのプルジェワルスキーは中央アジア探検史上どうしても避けて通る訳にはゆかないのである。

プルジェワルスキーの全五冊に及ぶ著作は、彼が夫々の探検を終え、次の探検行に向かうまでの間に記述出版された。既に現在では入手のむずかしい稀覯書が多いであろうし、よし手に入れてもロシア語を読みこなせなくては宝の持ちぐされであろう。

一九五三年に至りソ連の地理学博士ムルザエフ教授の編集に

会員通信

晩餐会から高尾山山歩きとご苦労さまでした。楽しい一連の行事が済んで、私ども地方の会員は本部の暖い歓迎の諸行事、心暖まるご計画に対し感謝しています。昨年来、晩餐会や支部対応の手厚く行き届いた催物には感謝しています。支部会員がもっと沢山参るとよいと思っています。高尾は快晴に恵まれ、東京の皆さんに案内してもらえ感謝しています。この機会に三水会や婦人懇の皆さんと折入って山歩きを楽しむことができました。こうした機会をこれからも作って下さい。（西沢健一熊本支部長より三水会あて）

カット／柏　秀樹

＊

高尾山、城山、とお陰様で秋山を万喫させて頂きました。初めての山域でしたが、本当に立派な山域と展望に、すっかり度胆を抜かれました。杉木立、それに桜並木は正に奥多摩の丘陵です。

遠く富士、丹沢の眺望も絶景でした。仕上げの烏山の鳥料理にも正にたまげた次第です。東京といっても良い所が多いですね。また の機会を楽しみにして、取り敢えずお礼まで。（斎藤平七前新潟支部長より三水会あて）

お知らせ・お願い

第十七回講演会

科学研究委員会

日時　昭和五十八年四月八日（金）午後六時三十分

場所　日本山岳会ルーム

講師　コロラド大学教授 R.G. Barry 博士

題目　山岳の気象

通訳　筑波大　小野有五氏

＊

用済み映写機寄贈のお願い

現在、当会には故障気味の8ミリ映写機が一台だけあります。16ミリと8ミリのフィルムを映写する機会が多く、今度、ルームに設置したいと思います。

どなたか用済みの8ミリの映写機をお持ちの方がありました寄贈してくださるようお願いします。事務局まで御連絡下さい。

（総務委員会）

＊

★本会元役員藤井運平さんの思い出を纏めた小冊子（A5判40頁）ができました。執筆者は本会員で故人と親しかった友人数名。頒価五〇〇円、ルームで取扱っています。郵送ご希望の方は六〇〇円。

より『探検』と題してその全旅行記が一冊の本に纏められた。本訳書の原本がそれである。原本の序文には「プルジェワルスキーの著作は非常に興味深いが、なにしろ大著であり、ところによっては専門的な記述も多い。そこで探検家の全著作を若干簡略し、全五回の探検行を一冊の本にまとめた。しかし著者の原文にはまったく手を触れていない」と述べられている。以上のことを私は訳者のあとがきから知った。

プルジェワルスキーの元版本には動植物の叙述が頻繁に出てきて、一般の読者には些か読みずらいところもあるので、ムルザエフ教授の編著は、その点彼の全探検記をやや平易に通読できる。ことに百年の時代をへだてた現代人には、まことに恰好の編著と言えるであろう。

訳者の田村氏はロシア開拓探検史・ソ連地理学を専攻されたばかりでなく既にロシア語から探検・登山の諸書を訳出され、また自らもパミールやヒマラヤへ登山に赴いた経験の持主である。

今回の翻訳は、なめらかな日本文に移されているばかりでなく、原本等からの図版が口絵、本文中に数多く挿入されている。また度量衡の単位は古いロシアの単位から現行のメートル、グラムに改めるなど、細かい配慮がほどこされている。また付された探検ルート図もきわめて明解で読者に親切である。そのためにB6判上下七〇〇頁（8ポ二段組）を超える大著を、私はまことに興味深く読み通すことができた。それにつけて思うことは、多忙な業務の間、訳者がこの翻訳のために払われた努力はいかばかりであったろう。

なお上下巻に分けてコズロフのプルジェワルスキー伝（約一二〇頁）が加えられているが、プルジェワルスキーを知る上に最もすぐれた伝記であると思われる。

本訳書を得たことで、われわれは従来第三者の筆による概要でしか知り得なかったプルジェワルスキーの全探検を、彼自身の筆によってすべて知ることが出来るようになった。

白水社刊　上巻　一九八二年八月刊　二七〇〇円。下巻同年九月発行　二九〇〇円（望月達夫）

ヒマラヤの灯

宮原　巍　著

この本はエベレスト・ビュー・ホテルを建てた著者の苦労を綴った本である。山好きの者なら、著者がこのホテル建設のため東奔西走したことを知っているだろう。その様子が細かく記されている。これまでの努力が並大抵でなかったことを知り、改めて敬意を表する次第である。

山仲間たちの物心両面での協力、それに身寄りの方々の過大な尽力は、どの章を見ても感じられる。読み終えてから、恵まれた環境にありながらも、なお企業としての将来には多難が予測でき、著書の健闘を祈らずにはおられない。

日本にあれば、誰も人の金儲けにロハで協力しはしないだろうが、エベレストの見える丘に建てたためかえってその協力を受け、採算ベースに乗せにくくなったのではないかと思った。ホテルと看板を掲げたからにはそれだけのサービスを、特に欧米人は期待するだろう。日本と違いヨーロッパの山小屋は殆ど山岳会が所有し、宿泊費で経営を黒字にしようとしてはいないらしいが、エベレスト・ビューがヨーロッパの山小屋並みの低料金を日本人登山者に適用するのは無理だろう。しかし、僅かな資金を出した者も、日本のホテルのような山小屋になって欲しくないと思っていはしないか同じ山仲間の一人として、私は恐る恐る考えるのである。

一九八二年十月三十日　文芸春秋社刊　一二〇〇円

（岡沢祐吉）

図書紹介

・報告・

自然保護全国集会

自然保護委員会

十一月十三日（土）
14時30分～17時10分
井川少年自然の家にて

出席者　国見利夫、中村純二、渡辺正臣、池田剛、中村あや、中保、高沢英雄、遠藤光男、草野洋一、関塚貞亨、松本恒広（東京）、小川務（東海）、野島福三郎、石坂久忠（富山）、仲西政一郎、三上智津子（関西）、荻野恭一、長島吉治（静岡）、佐々保雄、山本朋三郎、西郷正郎、近藤信行、山本良三、岡沢祐吉、荻原賢司　以上二十五名

本年度のJAC自然保護全国集会は静岡支部のお世話により、もみじ会と併催で井川少年自然の家において午後二時半から中村担当理事の司会により開催された。

山本静岡支部長、静岡支部自然保護委員の荻野氏並びに井川山岳会長島会長らの挨拶の後、全員で自己紹介。議長に国見委員長を委嘱、議事に入った。東京での活動状況報告（フィールドマナー・ノートの作成状況、現地視察、国際機関との協力、日米環境会議への参加等）の後、本日のメーンテーマであるフィールドマナー・ノートの討議に入った。

・このノートはJAC会員を対象としたもので、その他一般団体用のノートは次の段階で考える。大きさは山日記のサイズとし一六ページくらいとする。

・表現をやわらかく、できるだけイラストやカットも入れて楽しく読めるようにする。

・剣三ノ窓周辺もよごれがひどい、指定地以外の幕営禁止等をはじめマナーをもっと徹底させるために各山岳団体へも配布したい。

・たとえば大阪市自然保護課や山岳会、あるいは電鉄会社のパンフレットなどにも転載を許可してほしい。

大日峠／松本慎太郎

・登山届などの件がノートにはふれてないので追加したらどうか。

・夏スキーでの塩のばらまきについて、スキー連盟とも話合いはできないか。立山雷鳥沢や乗鞍で影響が大きい。

・洗剤などはなるべく使用しないと改める。

・たばこの灰や吸い殻は必ず携帯灰皿に入れて持ちかえると改める。

・山でマナーの悪いのをみかけたら注意したい。

種々討議の後、このようなフィールドマナー・ノートを作成することにつき全員の同意を得た。そして字句の最終的な修正は委員会に一任することになった。なお発表の時期は来年三月を目標とする。

この後、遅れて出席された佐々会長の挨拶に続き、富山、関西、静岡、東海各支部より活動報告がなされた。特に東海支部より御在所岳水質問題について関係法令を調べていくうちに基準内規制の面で壁にぶつかって難渋している旨の報告があった。また委員会から北沢スーパー林道の修復停止に関する要求の説明がなされた。

夜は六時からもみじ会の懇親会に全員合流した。不断は酒も厳禁の少年の家ではあるが、この日は特別で約七〇名に近い出席者は七～八名ずつテーブルに分かれ歓談の花が咲く。二次会は部屋を移して静岡支部メンバー中心のにぎやかな一刻、一同静岡岳人の高説を拝聴していた。

翌日は雲一つない快晴、記念撮影の後、静岡支部会員の案内で大日峠越えのコースを歩く。井川湖を眼下に新雪の赤石岳、聖岳、大無間など南ア南部の素晴らしい眺め落葉を踏んでの楽しいハイキングであった。口坂本にある静岡市営の温泉浴場（PH0.9アルカリ性重曹冷泉）でさっぱりし、昼食の後バス二台に分乗し、支部心づくしのお土産を手に帰途についた。

（**松本恒広・中村純二**）

八方尾根スキー山行

集会委員会

一月中旬恒例のスキー現地集会は、今年も八方尾根黒菱の中央大学山荘で開かれた。

一月十三日夜新宿スバルビル前から会員多数の見送りをうけて出発。さっそくバスの中は差入のアルコールで早くも宴会が賑々しく始まった。酔い潰れる頃車窓の外は須玉付近から雪が舞っていた。

一月十四日　雪不足の心配を吹きとばす風雪の早朝白馬に到着。若干遅れた始発のケーブルで兎平に降りれば、昨夜来からの新雪が三〇センチ以上積り、除雪のためリフトの運転が大幅に遅れる模様なので暫く自由行動となり、深雪のリーゼンを滑降したり、レストハウスで休息する等しているうちにリフトも運行開始、十時半頃から食料を中心とする荷上げが始まり、昼前には山荘に落ち着く。午後自由行動。宿泊二十三名。

一月十五日　信濃支部青木氏外続々と到着。山荘はこの日三十三名の盛況となった。

山荘周辺は終日ガスが濃く視界が不良なため、兎平から下方が良いと言うので大部分の人々はパノラマゲレンデ方向へ移動したようである。にもかかわらず参加者の最長老久保氏と関西支部から参加した安土氏の両名は、五十六年十一月新設された八方池山荘までのリフトより更に上部の第二ケルンへ登り、ツアー気分を味わってきて快気炎。オールドパワーの前に中年も若年もタジタジの呈。

懇親会昼の部は午後一時山荘前に全員集合。これも恒例の雪上ゲームが仲林コーチの指導で展開、全員童心に還って大奮闘であった。夜の部は豪飲蛮歌の大宴会と化し、お国自慢の唄くらべ、室内ゲームを混じえ延々未明まで続いたのであった。中でも某氏による白鳥のバレーの狂演は大爆笑を誘った。

一月十六日　晴れゆく雲の合い間から、白馬三山が勇姿を見せた。樹々には霧氷がつきメルヘンの世界だ。尾根に登れば鹿島槍が逆光に鈍く光っている。汗ばむ程の陽気、山を下りる日にしてわれわれの願いが叶った。粉雪のスラロームを存分に楽しんだあと、十一時山荘前にて散会となった。バス組二十二名はリーゼンコースとチャンピオンコースの二手に分

北沢峠広域基幹林道の修復停止の要望

さまざまの論議を呼び，開通まで 13 年の歳月と 50 億円の巨費を要した北沢峠広域基幹林道（南ア・スーパー林道）は完成後3年を待たずして，昭和 57 年8月1日から2日夜にかけての台風 10 号と大雨のため莫大な被害を受けた。

その崩壊は夜叉神峠―北沢峠間の鳳凰側皆伐斜面下で特に凄じく，橋の流出は9ヶ所，道路の崩落は200ヶ所以上にも及んでいる。そしてすべての橋が崩壊した広河原―北沢峠間の修復には3年以上の年月と 10 億円以上の費用を必要とするといわれている。

この際，私共は以下の理由によって，広河原―北沢峠間の林道の修復停止と，自然の復元を強く要望するものである。

(1) 南ア・スーパー林道は着工の条件として，完成の暁には地域住民が広くこの林道を利用し，地域の過疎化防止や発展につながることが唱われた。しかし完成後数年間の実績をみるとその利用率は極めて低く，大部分の交流はよく舗装された山麓迂回の車道や高速道路によっていた。

(2) 広河原―北沢峠間は傾斜もきつく，地質もよくないので，その工法には十分留意するとの約束であったが，結果は上記の通り，完成後3年を経ぬ間に大破壊を来たしている。これには勿論，台風と豪雨という異常気象も与っているが，このような異常気象は数年乃至十数年目毎に繰返される可能性が極めて高い。

また，皆伐の非も兼ね兼ね問われて来たところで，今回はまさに，そのつけが回って来た状況であるといえよう。

(3) もともと，夜叉神峠から北沢峠に至る野呂川源流地域は，我国有数の景勝の地であり，豊かな緑や美しい流れの見られる自然の宝庫であった。たとえ，工法に十分考慮の払われた車道ができたとしても，車で通過したのではこの自然を味うことはできない。細い山道を辿り，渓流を渡り森や土の香りを嗅ぎながら歩くことによって，はじめて，自然の偉大さや恩恵を認識することができる。

(4) 多額の税金を無益な林道の修理に費やすことを止めて，その何分の一かで，この地域の歩道整備，崩壊地や車道部分の植生回復を計ってはどうであろうか。それは地元にとってもそこを訪れる人間にとっても，図り知れない利益と豊かさをもたらすにちがいない。そればかりでなく，自然の復元作用・自浄作用も相俟って，この野呂川源流の自然環境は永久に後の世代に伝えられることにもなる。

私共は，この際国費の無駄遣いを避け，地球全体の立場から見て，かけがえのない貴重な自然を残す目的で，広河原―北沢峠間のスーパー林道の修復工事が停止されることを切に願うものである。

昭和 57 年 12 月

日本山岳会　会長 佐々保雄
同上自然保護委員会　委員長 国見利夫

お知らせ

◎行事案内

☆総会　五月二十一日（土）
私学会館（東京　市ケ谷）
会員各位のご出席をお願いいたします。

☆東北支部ブロック懇親会
五月二十八～二十九日
宮城支部の担当で金華山で行ないます。（詳細別掲）

☆日韓交流登山　青年懇談会
韓国O―RM山岳会を迎えて五月上旬に会室での歓迎会とあわせて行なう予定です。

☆会員・支部懇談会　総務委員会
東京での総会の後、静岡の禅寺に場所を移して行ないます。

☆山菜山行　集会委員会
六月十一～十二日
片岡博氏を講師に越後支部の協力を得て守門岳で行なう予定です。

◎会室行事案内

☆海外委員会の講演会
○四月七日（木）
「カナダ山岳情報」

南ア・スーパー林道修復停止の要望書提出

自然保護委員会

今回自然保護委員会では、南アルプス広域基幹林道の惨胆たる現状とその将来を慮り、別掲のような修復停止の要望書を作った。これについては理事会や山梨、信濃支部にも連絡の上、昨年十二月十七日付で左記関係各方面に発送した。

山梨県知事、林務部長、県民生活局長。長野県知事、教務部長、生活環境部長。農林水産大臣、林野庁長官、林政部長、森林保全課長林道課長。および環境庁長官、自然保護局長、保護管理課長、自然環境保全審議会々長、以上。その他日本自然保護協会、日本環境協会、日本山岳協会、国立公園協会、日本野鳥の会、環境庁記者クラブ、山と渓谷社、岳人等にも連絡し一応の反応が出ている現状である。

今年春の雪解けを待って開始されるであろう広河原―北沢峠間の林道の修復にこれ以上無駄な税金が使われたり、自然を傷つけて取り返しのつかない状態になったりしないよう、会員各位におかれても、この問題に対し何分のご理解ご協力を頂くよう併せてお願い申し上げる次第である。

（昭和五十八年一月
担当理事　中村純二）

散、バス停で集結。十三時半八方出発帰路につく。途中渋滞が予想されたが迂回路を走り、一睡の間に塩尻経由北伊那インターに入っていた。南アや北八ッの透徹した冬景色を眺めているうち自然発生的に唄声が車中に溢れ、新宿まであらゆる歌のレパートリーを披露し合った。最後に声が潰れてしまった入沢会員の音頭でJAC萬歳を三唱。またの日の再会を約して八時前には新宿西口で解散した。

参加者（東京）東原進、林邦明、吉田実、久保孝一郎、大野昭二、小松原一郎、若林修二、入沢郁夫、高橋聡、市村洋子、岡健治郎、浜口斥一、高原三平（関西）安土武夫、（信濃）青木、角田、他九名、（集会委員）村木富士、神山良雄、若林幸子、小野寺優子、片岡泰彦

（若林修二）

会務報告

2月理事会

黒川　恵氏

○五月十二日（木）
☆会員懇談会　自然保護委員会
○四月十五日（金）
白神山地のブナ林と屋久島の杉の保護問題について。
☆三水会例会
○四月二十日（水）
ヒマラヤトレッキング報告会。
○五月十八日（水）
佐々保雄氏の講演
「アリューシャンの夏」
問合わせは各委員会、または事務局、集会委員会までお願いします。

・――――・――――・

◎寄贈フィルムのお知らせ

このたび会員高橋照氏（会員番号三〇四七番）から、貴重な山岳記録フィルム十本を、本会に一括ご寄贈いただいた。

これらは全部16㎜フィルムで、高橋氏が意欲的に製作、愛蔵されていたものであり、多くの秀作が含まれている。

フィルム委員会では、これらを整理のうえ、会のために永く保存管理をしてまいりたいと存じます。

貴重なフィルムを多数ご寄贈いただいた高橋照氏に、心から感謝申し上げます。

なおご寄贈いただいたフィルムは次のとおりです。

一、ネパール（カラー）英語版
二、一九六二年プレ、ジュガール・ヒマールのビッグホワイトピーク初登頂（カラー・一九六二年度民放祭最優秀賞および一九六二年アメリカ・エミー賞三位受賞作品）
三、積雪期の上越国境縦走　巻機山、清水峠編（白黒）
四、厳冬の鹿島槍東尾根（カラー）
五、積雪期の魚沼三山初縦走の記録（カラー）
六、一月の穂高・明神の東稜（カラー）
七、僕の剣岳（夏）（カラー）
八、アイガーの北壁（白黒）
九、冬富士（大宮口）（白黒）
十、氷雪技術　富士山講習会（白黒）（フィルム委員会）

＊

◎JAC東北ブロック集会

第二回東北各県支部会員
親睦会と山行
担当　宮城支部

南三陸のリアス式海岸にうかぶ、モミ、ブナの原生林の頂きがひときわ高い金華山で行ないます。

会場　金華山
（宮城県牡鹿郡牡鹿町大字鮎川浜字金華山　五）
宿泊　金華山神社参集殿参篭
TEL（02254）5-2264
期日　昭和五十八年五月二十八日（土）～二十九日（日）
予定
二十八日（土）　現地集合　十七時まで　金華山神社参集殿にて親睦会と参篭
二十九日（日）親睦山行
六時三十分起床　御祈祷と朝食。参集殿出発　八時
参集殿―山頂―千畳敷―灯台―船着場
会費　六、五〇〇円
定員　七十名
申込締切　五月十日必着
申込先　〒983仙台市茂庭字中の瀬東五の十四　佐々木豊喜
TEL（0222）81-0035
交通
・自家用車コース
東北自動車道古川ICより国道一〇八号線　石巻―女川―牡鹿コバルトライン（有料）―鮎川船着場に町営駐車場あり。
船、鮎川発八時三十分～十五時三十分まで一時間毎。金華山発九時～十六時まで一時間毎
・国鉄コース
仙台―石巻―女川　国鉄又はバス（宮城交通）
女川―金華山　船

お知らせ

2月7日午後6時30分
本会・ルーム

出席者　佐々会長、渡辺、田口副会長、神崎、伊丹、西村、小倉、高橋、菅沢、赤松、大倉、河村、松家、鈴木、中村各理事、小倉、太田各監事、小原、佐藤、松丸各評議員

（**委任**）川上、水野、岡沢、田村、高本各理事、大塚、村木各評議員

◎報告事項

▽中央大学OB山岳会、ランタン・リ登山計画の推薦の件　了承
▽製品安全協会の山岳用品専門委員会に金坂会員が委員として参加の件　了承

◎審議事項

▽昭和五十八年度、事業計画・予算案作成の件、常務理事会で各委員会からの提出資料によって第一次案を作成した。検討してほしい。若干の意見交換の結果、三月理事会に原案を作成、提出し、決定することにした。
▽会費値上げの件、昭和五十七年度の財務進行状況と会活動実績とを考えると、五十八年度は会費据置きでやっていけると予想される。五十九年度も同様と考えるが五十八年度中に、会員にアンケート調査を行ない、会活動についての会員の意向の実態を明らかにして、その上で検討することにした。

◎懇談事項

▽常務理事会と理事会の機能をより効率的に発揮できるように検討中である。いろいろ意見をだしてほしい。（総務委）
▽外国の山岳界との交流の必要性が増加してきている。対応について検討してほしい。（佐々会長）
▽フィルム委員がスタートしたので積極的に資料を集め、また保存について工夫していきたい。16㎜の撮影機を是非ととのえたいが、よい案はないか。（フィルム委）

ルーム日誌　（58年1月）

10日（月）　理事会
12日（水）　フィルム委員会
13日（木）　海外委員会
14日（金）　指導委員会
17日（月）　高所登山委、図書委指導委
18日（火）　婦人懇談会
19日（水）　三水会
20日（木）　会報編集委員会
12日（金）　集会委員会
24日（日）　自然保護委
25日（火）　婦人懇談会
28日（金）　科学研究委員会
31日（月）　高所登山委、遭難対策委、総務委員会

今月の来室者359名

会員移動（1月）

支部変更
6659　田上　敏行（熊本へ）
終身会員へ
7214　中名生　正昭

図書受入報告

図書委員会

昭和 57 年 8～12 月分受入

1 伏見功著「富嶽歴覧　外国人の見た富士山」現代旅行研究所 1982（版元寄贈）
2 岡田貞峰著「精鋭句集シリーズ 7 雲表の道」牛羊社　1975（岡田邦三郎氏寄贈）
3 同志社大学山岳会編「ダウラギリ主峰登頂報告書」　1982（太田徳風氏寄贈）
4 大阪外国語大学カラコルム学術遠征隊編「カベリ氷河からのチョゴリザ遠征記 1980 年 6 月～8 月」　1982（田村俊介氏寄贈）
5 白籏史朗著「名峰日本アルプス」山と溪谷社　1982（版元寄贈）
6 白川義員著「錦秋と火の山（日本）白川義員山岳写真全集 1」小学館　1982（版元寄贈）
7 木村明男・安池澄江編「みーちゃん　木村翠作品集」木村明男　1982（高橋達雄氏寄贈）
8 佐藤節著「西上州の山と峠」新ハイキング社　1982（著者寄贈）
9 郡馬県ミヤマ山岳会編「白き神々の座に召されて」1981（八木原圀明氏寄贈）
10 「永遠の北壁　チョモランマ　宇部明氏追悼録」　1982（宮下秀樹氏寄贈）
11 塚本珪一著「アウトドアー・ライフ・サイエンス　自然活動学ハンドブック」岳書房　1982（著者寄贈）
12 小林太刀夫著「山の写真集」中央公論事業出版　1982（著者寄贈）
13 日本自然保護協会編「野外における危険の生物」思索社 1982（版元寄贈）
14 旭川山岳会監修「大雪山　ヌタクカムウシュペ」北海道地図 1981（佐々保雄氏寄贈）
15 須田栄一著「写真集峻岳に魅せられて　谷川岳点描」1982（著者寄贈）
16 二高護国尚志会山岳部編「二高山岳部部報　朝日特輯号」1941〔コピー製本〕（東北大学山の会寄贈）
17 二高尚志山岳部編「蔵王山登山要録・蔵王山」1937／41　C コピー製本 J（東北大山の会寄贈）
18 山県登編「アジア内陸踏査探検文献抄／二高山岳会報　特別号」1943／44〔コピー製本〕（東北大学山の会寄贈）
19 佐伯邦夫著「会心の山」中央公論社　1982（版元寄贈）
20 国立極地研究所編「南極の科学 7 生物」　1982（編者寄贈）
21 寺本政幸遺稿と追悼集編集委員会編「山に懐かれて」　1982（安藤忠夫氏寄贈）
22 高田収編「中高年向きの山 100 コース関西編」山と溪谷社 1982（高田収氏寄贈）

（以下次号）

お知らせ

山研五月一日開所予定

上高地山岳研究所は五月一日開所予定です。詳細は次月会報に発表します。

（山研委員会）

＊

グリンデルワルト フェスティバル

当日グリンデルワルトで行なわれたブラヴァント氏と田口二郎氏の懐旧談が、三月二十七日（日）十五時からのTBSの番組の中で放映されます。

あとがき　ソ連のアルピニストのポルヤコフは、メスナーのエベレスト登頂も〝理性のない冒険〟ときめつけているらしい。（O）

会費を納入して下さい　事務局

昭和五十八年三月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 佐々保雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂